近代をどう超えるか
――後藤新平の台湾統治を手がかりに

神山睦美

植民地経営の理念

岩手県奥州市水沢区。私の生まれ育った東北の地は、市町村合併の結果このような名称で呼ばれるようになった。もとは、岩手、水沢。偉人のふるさとなどと呼ばれ、江戸後期の蘭学者高野長英、明治大正の大政治家後藤新平、2・26事件で凶弾に倒れた昭和の宰相斎藤実などを輩出している。

幼い頃から、この三人にまつわる偉業について聞かされてきたせいか、子供心にもどこか誇らしい気分を抱いていた。隣の花巻には宮澤賢治、盛岡の北の渋民村に石川啄木と、優れた先人の話題には事欠かない。長ずるに及んで、文学や哲学や歴史について学ぶことになったが、どういうわけか郷里の先達については関心が向かず、もっぱら西欧の文学者、哲学者の残したものを渉猟するようになった。

日本の文学者でも、賢治より漱石を、啄木より中也を、といった具合で、高野長英や後藤新平については、その跡をたどってみたいという気にはなかなかなれなかった。

ところが、しばらく前に夏目漱石について調べているなかで、後藤新平の業績をたどらないわけにはいかなくなった。『こころ』という小説に、明治天皇崩御について出てくるのだが、天皇御大葬の日に、妻とともに殉死した乃木希典を挙げ、この人への深い共感が語られているのだ。

私は、乃木将軍という、かつては皇国精神の象徴のように祭り上げられた人物について、もっと詳しく知りたいと思い、資料を調べていった。そうしたなかで、いやおうなくといったしだいで、後藤新平に出会うことになったのである。

乃木希典と後藤新平の接点は、台湾統治にある。1895年（明治28年）日清戦争の講和によって清国から台湾を譲り受けた日本は、台北に総督府を置き、台湾の植民地化を進めることになる。乃木希典は、この第三代総督となって赴任したのである。乃木の台湾統治が、どのようなものであったか、さまざまな説があるが、老いた母親も同伴の上、台湾に移住した乃木は、結局統治に失敗してしまう。このとき、乃木の後任として第四代総督に就任した児玉源太郎のもと、民政長官に抜擢されたのが後藤新平なのである。

医者でもあった後藤新平は、独自の衛生学にもとづいて台湾統治を成功に導く。現地の状況を調査し、その状況に見合った経済改革と社会資本の建設を進めた。植民地台湾は、産業化と治安維持と医療行政の面で、飛躍的に整備されることになったのである。

このような統治の手法は、後に満鉄総裁となった際にも、発揮されることになった。満州国建設は、後藤新平の政治手腕なくしては語ることができないといわれている。

これらの成功の秘訣をたどっていくと、何が浮かびあがってくるだろうか。後藤新平のなかにはぐくまれていた、近代的な合理主義の考えである。

明治維新を成し遂げたわが国は、富国強兵、殖産興業を旗印に、西欧列強に一日も早く追いつくことを国是としてきた。日清・日露の戦争に国運をかけたのも、中国・朝鮮をめぐって西欧諸国の圧力をどこまで跳ね返すことができるかという問題がかかっていたからといえる。しかし、実際に明治政府の進めてきた政策には、当時の状況に対して対処療法的な方策をめぐらしたものも少なくなかった。これに対して、近代的な合理主義の考えを政治の場に根づかせ、

日本を近代国家として打ち立てていくためには何をしなければならないかを真剣に考えていた人々がいた。後藤新平は、そのなかの代表的な一人といえる。

彼らが、模範としたのは、西欧諸国のアジアにおける植民地支配の考えだった。たとえば、イギリスは、インドを支配するに当たって、東インド会社に象徴される大規模な産業を興し、民政の整備をさまざまな形でおこなってきた。インドの社会にはびこっていた古いカースト制度は、これらの合理的な社会政策によって改変されていった。蒙昧はしだいに啓かれ、因習の打破が進められた。

結果として、大小にかかわらずさまざまな富がもたらされることになったのだが、このような統治の理念のもとにあるのは、合理的な政策を行っていくならば、社会は進化するという考えだ。植民地支配は、たんに遅れた地域の資源や労働力を搾取するのではなく、それらをより進んだ段階へともたらし、そこに生み出された財や富を理にかなった形で分配するものである。

そこには、支配というよりも経営という考えが生かされているといえる。後藤新平をはじめとする近代日本の政治家は、このような考えが、植民地の統治だけでなく、国家を近代的なものとして打ち立てていくためには、ぜひとも必要なものと考えた。社会の遅れた地域に対して、合理的な政策を施し、一極集中的な形で近代化を進めていく。そのためには、強力な管理体制と、集権化が必要となる。それができあがったときはじめて、近代国家としての体裁が整うといえる。

この近代国家は、支配と管理を徹底するものであると同時に、より多くの財と富をもたらすものでもある。後藤新平の台湾統治の理念は、このような近代国家観に裏打ちされたものだったのだ。彼がはやくからこれを身につけていたのは、医学や衛生学といった西欧の合理主義にもとづいた科学の方法を手中におさめていたからと考えられる。

システムと統治

東北の荒えみしなどといわれる辺境の地に、後藤新平のような人物が現れたのは、不思議といえば不思議である。中央集権的な管理と支配の考えは、むしろ千年以上前にこの地を平定した朝廷のものといえる。合理主義的な考えの片鱗は、当時すでに中国を通して移入されていた。奈良平安期の朝廷がこれをいち早く受け入れ、律令国家の基礎を築いたことは、周知のところだ。

しかし、わが国における中央集権国家というのは、中国のような専制的な君主を権力の中心にすえてつくられたものではない。これは、鎌倉幕府や江戸幕府といった武士の政権にもいえることだ。江戸期の幕藩体制が、管理と支配とはほど遠いものであったことは、倒幕に当たっての薩摩・長州といった藩の力をみれば明らかだ。それだけでなく、薩長の藩閥政治などといわれた明治政府もまた、合理的な支配体制を敷くに至らなかった。長州出身の乃木希典は、台湾統治に当たって、管理体制とはまったく相容れない政治を行おうとしたとされている。

これにくらべると、後藤新平のなかに培われていた合理主義の精神は、異数のものといえる。そこには、江戸後期の蘭学者高野長英の、シーボルト直伝による開明思想が流れていたと考えることもできる。東北という風土には、日本やアジアといった地域性を越えて、西欧的なものの本質を根付かせてしまうところがあったといえるのかもしれない。

とはいえ、このような物言いが、一種のお国自慢に聞こえないとはかぎらない。後藤新平は、確かに私の生まれ育った水沢の地の偉人なのだが、彼の身に着けていた統治の理念には、19世紀から、20世紀において完成された世界理念が、確実に影を落としていた。それは、西欧に起源をもつものであると同時に、東北の辺境の地までも一望のもとにおさめてしまうものなのだ。

自分の生まれた土地ということを考えるとき、私はむしろ、このような統治の理念の問題点について考えずにいられない。辺境の地に文明の明かりをともすものであると同時に世界を一つのスポットライトのようなもので遠隔から照らし出すもの。そこには、決して喜ばしいだけでは済まない問題があったと思われるのだ。

このことについて、別の面から考えを進めてみようと思う。

人間の生活や、社会のありかたは、より進んだ状態に至るほどに、一種の均質性を帯びざるをえない。進化や進歩が約束されるためには、それら

は、決まった形や決まった内容のもと、一定の体系のなかに組み込まれていかなければならない。逆にいえば、そういう首尾一貫したシステムのなかにあることが保証されているとき、現実の生活は底上げされ、社会は、より一層整ったものになっていく。

とはいえ、人間の生活などというものは、もともとてんでんばらばらで、どういう生活の仕方が、人間にとって良いかということは、決めがたいところがある。社会のあり方もしかり。一握りの支配者のもとで、大多数が抑圧と貧困にあえいでいたとしても、そういう社会が、必ずしも全的に改変されなければならないということではない。いわれのない搾取や収奪などは、ないほうが良いに決まっているが、それらがあることが、彼らの生活や社会を遅れたものとして改変する理由にはならない。

ところが、くだんの世界理念は、これとまったく逆のことを考える。まずは人間にとって、より良い生活というものが、かくかくのものとして提示される。それは、お互いの安全が確保され、適度の財と富を所有し、いわれのない圧迫に苦しむことのない生活だ。社会は、そういう人間の生活を実現するためのものでなければならない。

そのためには、産業が盛んになること、治安が守られること、衛生が完備されることが第一とされる。実際に、抑圧と貧困のなかにある者にとって、そういう社会が目の前に実現されたならば、喜んでこれを受け入れることだろう。

しかし、彼らは、それを受け入れる代わりに、自分たちのありかたそのものを引き渡すことになる。たとえ、一握りの支配者と大多数の抑圧された人々といった関係にあったとしても、内心ではそれぞれ好き勝手に生きて、おたがいに掣肘をくわえたりしない、しかし旧弊な制度や因習が吹き荒れてきたときには、それのなすがままになるより仕方がないといったありかただ。

これを引き渡した結果、彼らに「より良い生活」がもたらされるのだが、時に、なんともいえない不自由感を味わうことがある。なぜかというと、そこにあらわれた豊かな社会、安全な社会というのが、一定のシステムのなかでの豊かさ、安全さでしかないからだ。システムはどうあれ、現実的に経済活動が円滑に進められ、治安が維持され、衛生状態に問題がないという社会であれば、不服はないという考えもある。しかし、不自由感は、なかなか消えない。

問題は、この一定のシステムが、人間が本来持っているてんでんばらばらなものを完全に均してしまうということ、しかも、そのことを、個々の人間に、決して断ることのできない要請として提示してくるというところにある。

しかし、それだけではない。いったん経済活動に狂いが生じたり、敵対的な状況が起こってきたりすると、豊かさや安全さはかりそめのものにすぎず、もっとぎすぎすしたものが、おもてに現れてくる。このぎすぎすしたものを最もよくあらわしているのが、民族と民族の、ひいては人間と人間の優劣関係だ。

たとえば、このような世界理念が、植民地政策としてあらわれた場合を考えてみるならどうか。経済が停滞し、世界中に敵対的な状況が起こってくると、この世界理念は、一つの民族が他の民族よりも優位に立ち、これを支配するものとしてあらわれる。劣位にある民族は、たとえ一度は豊かで安全な社会に浸ることができたとしても、不自由感を打ち消すことができない。

後藤新平の統治理念には、このような事態をあらかじめとらえたうえで、いかに対処するかという考えはなかったといえる。それは後藤新平のいだいた合理主義精神が、くだんの世界理念と決して対立するものではなかったからである。

オリエンタリズム

このような世界理念を、別の言葉でいってみるならば、たとえばオリエンタリズムというのが当てはまる。オリエンタリズムというのは、もともと西洋が東洋に対していだいてきた憧れや強い関心を指している。異質の文化に対して興をそそられ、心惹かれるのは人間の自然な性向といえるのだが、特に、19世紀から20世紀にかけて西欧の文学や美術には、この傾向が顕著にみられる。サイードは、この言葉を文化や芸術の領域から取り出して、西洋の東洋に対する支配と統治の形式として使用した。（エドワード・

W・サイード『オリエンタリズム上・下』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社）

人間が自分とは異なるものに出会ったとき、多大な好奇心をいだくのは自然な傾向といえる。この好奇心のなかには、憧憬と関心があると同時に、一種の怖れの感情がふくまれている。サイードによれば、西洋の東洋に対する思いはいつでもここに発していたとされる。自分とは異なるものを、後れたもの、気味の悪いもの、淫蕩なものとして貶めていく傾向。それを、もっと具体的な形であらわしたのが、植民地主義と人種差別にほかならない。

サイードの考えは、西欧的なものに対する感情的な反発に裏打ちされているようなところがなきにしもあらずだ。したがって、オリエンタリズムという言葉を、もう少し普遍的な場所に持ち来たらすことが必要ではないかと思われるのだが、そうしてみると、これがまさにイギリスのインド支配から日本の台湾統治にまで当てはまる世界理念をさすことが明らかになってくる。

19世紀から20世紀にかけて西欧列強は、アジア・アフリカを分割支配し、植民地化を進めていった。産業革命を経て大規模化した資本主義的生産様式は、国境を越え、既成の経済ブロックを越えた市場の拡大を急務としていたからといえる。植民地における原料と労働力の獲得は、生産コストの削減を進め、大きな利潤をもたらしていった。ロシア革命を主導したレーニンなどは、これを、資本主義の帝国主義段階における搾取といった言葉でとらえ、根底から批判している。

しかし、現実問題としてみるならば、植民地の産業化が、さまざまな面で地域社会に恩恵をもたらしていることも否定できない。富や財の蓄積、治安の維持、衛生の完備など、それまでにはない利益が生じていることは明らかなのである。したがって、このような植民地化を批判するためには、これが、西欧近代にあらわれた世界理念の一環にほかならないというところからなされなければならない。

この世界理念は、オリエントに対して自分とは異なるものとして一定の距離を置くというだけではない。これを、まずいかなる異質性をも均してしまうような等質の空間としてとらえるのである。

そのために、無限に遠い一点から一望のもとに空間全体を視野におさめるということが必要になる。鳥の眼から、下界を眺めおろすという意味で、鳥瞰という言葉が使われるが、この世界理念は、まさに鳥瞰によって世界全体を視野におさめるのである。

フーコーは、これを「一望監視方式」という言葉で説明した。『監獄の誕生』（田村 俶訳 新潮社）のなかで、囚人を監視する最も効果的な方式として出てくるのだが、中央に高い塔のあるドーム状の建物を想像していただきたい。塔の一番上には、監視人が居て、円環状にしつらえられたいくつもの独房の囚人を一望のもとに監視しているのである。

独房は、開放的なつくりになっていて、暗く陰惨な感じとは程遠いものといえる。そのことがかえって、囚人の監視を効果的に進める要因となっている。囚人は、自分たちが高い塔の上の監視室から見られていることを絶えず意識せずにいられない。そのため、いつの間にか居住まいを正し、自己規律を進めていかざるをえない。

もともとこの「一望監視方式」は、ベンサムによって考案されたものである。功利主義の考えをとなえたベンサムは、囚人を監視するという考えからではなく、できるだけ効果的な仕方で囚人を統治し、社会復帰を進めるという考えのもとにこれを考案したとされている。囚人は、見えない監視人の眼を絶えず背後に感じながら、自分に規律を与え、社会に適応しうる身体をかたちづくっていく。それは、確実に囚人に恩恵をもたらしているといえる。

フーコーは、このようなベンサムの考えが、近代における統治の思想の根底にあるものとみなした。そのうえで、統治される側にもたらされる恩恵や利益も、見方を変えるならば、より完璧な統治を進めるためのきっかけにすぎないことを明らかにした。問題は、これが、一望監視方式といった鳥瞰によってなされているというところにあるといえる。

ここには、見えない権力のあり方を告発するフーコーの批判精神がみとめられるなどといわれるが、たいせつなことは、むしろ、この一望の方式が世界を均質なものとしてとらえる近代

特有の世界理念をあらわしているというところにある。

フーコーは、このような世界理念による統治が、監視という言葉であらわされるような支配のかたちと切り離すことのできないものであることを明らかにした。経済的な停滞や敵対的状況の有無にかかわらず、そこには、支配と被支配、優位にあるものと劣位にあるものとの関係があらわれざるをえない。オリエンタリズムの弊害を批判したサイードは、このフーコーの考えを受け継ぐかたちで、オリエントに対する統治のあり方を問題にしたといえる。

近代をどう超えるか

後藤新平の台湾統治からはじめて、だいぶ込み入った話になってきたが、ここまで問題を煮詰めていかないと、植民地の問題にしてもわが国の近代の問題にしても解けないのではないだろうか。

東北の荒えみしの出である後藤新平に、フーコーのいう高い塔の監視人のイメージは似つかわしくないともいえる。が、たとえば台湾統治に失敗した乃木希典をここにならべてみるならば、やはり、後藤新平は有能な監視人の一人にみえてくるのである。

それというのも、この乃木希典という人物には、有能さとはまったく別のイメージがついて回るからだ。優れた軍人であることはまちがいないのだが、西南戦争では連隊長として指揮を執るものの連隊旗を奪われるという失態を演じ、日露戦争の旅順攻略に際しては難航を極め、多くの犠牲者を出したといわれている。台湾統治に際しても、合理的な管理体制とは程遠い施策を行い、さまざまな面で破綻をきたしていたとされている。そういう意味で、どこか昼行灯のようなところのあった人物といっていいだろう。

ところが、乃木希典の謦咳に接したことのある人間は、口をそろえて、この人物の器量の大きさについて語っている。たとえば、日露戦争当時、旅順攻囲戦の陣中において乃木将軍に接したシカゴ・ニューズの従軍記者スタンレー・ウォシュバンは、その人格をたたえて『乃木』（スタンレー・ウォシュバン著、目黒真澄訳『乃木大将と日本人』講談社学術文庫）という本を著した。乃木殉死が、森鷗外や夏目漱石を深く動かしたことは知られているが、彼らのなかに、乃木希典という人間に対する畏敬の念がなければ、『興津弥五右衛門の遺書』や『こころ』を書いて、その死を悼むということはなかっただろう。

いったいなぜ、彼は、多くの人の共感をあつめたのだろうか。その理由をたずねていくと、近代という時代とは相容れない資質に出遭ってしまうのだ。

やはり、乃木希典には、指導者として頂点に立つということに含羞をおぼえずにいられないところがあった。その力量を買われ、いつの間にか頂点に祭り上げられるものの、周囲が期待したような有能な指揮を決してとることがない。いつでも画竜点睛を欠くようなしだいに、みずからを追いやっていく。しかしそのことが、なんともいえない懐の深さと雅量の大きさを印象づけたのではないか。

近代があらわにした世界理念は、まずこういう資質をなみすることで打ち立てられたものだ。台湾統治に当たって、老いた母までも連れて覚悟の赴任をした乃木希典は、結局、彼の地に母の遺骸を残すことになる。植民地支配ということについて、さまざまな矛盾を眼の前にした時、これを統治という理念で処理することが容易にできなかった。どのような事態も、均質な空間の函数のようにみなし、これを一望のもとにとらえる世界理念からするならば、個々の事態にあって、対処に苦しむやりかたは、あってはならないものなのだ。

これにくらべると、後藤新平をはじめ、児玉源太郎、新渡戸稲造といった人物には、台湾統治に際して、植民地に噴出するいかなる矛盾も、解決可能な要因からなることを捉える手腕があったといえる。フーコーのいう「一望監視方式」をそれぞれの仕方で身につけた、有能な政治家であった。にもかかわらず、彼らのなかには、この「一望監視方式」をどのようにのりこえていくかという視点がなかった。キリスト教の精神を身につけた新渡戸稲造などには、統治の限界ということについて顧みる余地がなかったとはいえないのだが、それが、近代をどう超えるかというモチーフにまではつながらなか

った。

臨床医学の方法

このことを考えると、フーコーがこれについて提示した方法は、やはり注目に値するものということができる。統治ということの問題点を、支配と被支配、優位と劣位という関係に見出したフーコーは、その象徴的なあらわれを、福祉国家の政治形態に見出すのである。後れた地域や持たざる者に恩恵を与えることによって、これを統治していくという近代国家の理念は、福祉という形態に最もよくあらわれるからだ。

このフーコーの考えについて、福祉にまで支配の権力をかぎつけることは、行政がおこなう施策だけではなく、人間の営みそのものが、見えない力によって操作されているという観念を流布することになると批判されることがある。しかし、フーコーがおこなったのは、「一望監視方式」という問題のたてかたそのものにまつわる一種の被害感情をいかに抜き取るかということだった。

そのためには、近代の世界理念が、いかなる要因も均質化し、操作可能な函数と化していく仕方に対して、ただ反発し、批判するだけではいけないと考えた。そのうえで、これを、むしろ極限まで進めなければならないと考えたのである。そこには、一望監視どころか、どのような監視からも解かれた公平な空間があらわれるとされる。

この公平な空間というのがどういうものなのか。フーコーは死の三角形という言い方で説明するのだが、『臨床医学の誕生』（神谷美恵子訳、みすず書房）のなかで、近代医学の方法がどのようにして成立したかを論じながら、そのことへの言及がなされている。

たとえば、大学病院や総合病院で治療を受ける場合を思い描いてみていただきたい。患者の症状は、すべてコンピューターにインプットされ、精密なカルテのようなものがつくられていく。そのうえで、医療はいかなる病も治療可能なものとみなしていく。それは、医療自体が「一望監視方式」を採用していく過程ということもできる。

実際には、どんなに高度な医療を駆使しても、すべての病を完治させることは困難だ。にもかかわらず、医学の方法は、病気をもたらす要因を身体の局所に探り出し、これをいずれは除去することを目指す。

フーコーによれば、医学はそれを、病理解剖学の成果をとりいれることによって行なう。治癒することなく倒れた患者の死体を解剖することによって、症状の綿密な配置図を死体空間のなかに読み取るというのである。ところが、そこにあらわれるのは、図鑑などで見られる人体解剖図のようなものではない。もっと抽象的な、たとえばランドサット衛星によって撮影された大都市の地図のようなものだ。

人体は、はるか上方の一点から鳥瞰されたものであるかのように、無数の局所を通した網の目状の構成として描かれる。しかも、その局所は絶えず変転して、他と取替え可能であるかのような位置を占めていく。それは、まったく均質な、公平このうえない空間といえる。

なぜこういうことになったのだろうか。

病の局所は、死体ということを通過することで、遠い宇宙のかなたから射す死の光によって照らされたものにみえてくるからだ。このような空間に配置されたとき、病の意味は、医学が目指したものとはまったく異なったものとしてあらわれる。病は、もやは治療可能な症状というのではなく、死というものが生命に刻印した徴候としてあらわれるのだ。それは、死において完全な欠損へと至る生命の損傷状態ではなく、刻々の死のあらわれであると、フーコーは言う。

死の三角形

フーコーの言わんとするところは、現実の医学や治療ということから外れて哲学の領域に近づいているともいえる。ただ、病が、死のあらわれであり、生命そのものもまた、大いなる死の光に照らされるとき、あるべきすがたとしてあらわれてくるというのは、とても納得のいく考えのように思われる。それは、フーコーの方法が、近代の世界理念を批判するだけでなく、これをどのように受け取っていくかというモチーフをもはらんでいたからといえる。

「一望監視方式」に問題があるのは、いかに有意義な統治を行なおうとそこには、支配と被支配、優位と劣位の関係がみえないかたちでできてしまうからだった。医学をはじめとする近代の世界理念には、この傾向がまちがいなく認められる。それだけでなく、医学は、この世界理念が、あくまでも生の側におかれたものであることを明らかにする。どのような症状も治療可能なものとみなし、すべてを向日性のもとにもちきたらすもの。近代というのは、そのような増殖する生への信奉によって成り立っていることが明かされるのだ。

そこでは、より多くのポジティヴな要因を獲得したものが、先に立ち、これを手に入れることのできないものを従えていく。「一望監視方式」とは、その意味で、絶対的な生の原理によってつくられたものということができる。

これに対して、一望のもとにおさめるその頂点が、死という無限遠の一点とされるとき、どういうことが起こるだろうか。少なくともそこに、優劣の関係は生じない。どんなに優位にあるものでも、いずれはこの死の光のもとで、消滅することが約束されているからである。

そのことは何という深い慰めであろうと、フーコーはいう。すべてが均質で、公平な空間のなかに配置されるということは、どのような要因も絶対ではないということだからである。そこには、近代の世界理念が拭い去ったてんでんばらばらのありかたが、まったくあらたなかたちであらわれているといえる。てんでんばらばらで、しかもたがいにとりかえ可能であるようなありかた。

フーコーは、生、病、死の三角形という言い方をしたりするが、この三角形の頂点は、固定された絶対ではなく、いつでも変換可能なものと考えるならばどうか。どこかぐにゃっとした、でも、どこか心地よい形というのがそこにあらわれるのではないだろうか。

そういえば、後藤新平という人は、関東大震災の後、帝都復興計画というのを打ち立てたのだが、あまりに壮大なその計画は、現実味のないものとして当時の官僚、政治家からまったく相手にされなかった。後藤新平からすれば、得意の世界理念をこの復興計画に盛り込んだつもりなのだろうが、あまりに均質で公平極まりない空間の設計は、まさに大いなる死の光に照らされた空間であったのかもしれない。

その後、後藤新平は政治の世界に恋々とすることなく、ボーイ・スカウトの創設に力を尽くす。どこかセーラー服に似たボーイ・スカウトの制服を身につけた後藤新平の写真を眼にしたことのある方もいると思う。私は、水沢の後藤新平記念館でその拡大写真を眺めたことがある。そのとき同時に、満鉄総裁就任の挨拶かなにかの肉声を収めたレコードをイヤホンを通して耳にしたのだが、東北弁丸出しのその口調に、思わず頬のあたりがゆるんでくるのをとどめえなかった。